

戦後七十年 平和と戦争を 考える

声明書

戦争は、防衛を名目に始まる。
戦争は、兵器産業に富をもたらす。
戦争は、すぐに制御が効かなくなる。
戦争は、始めるよりも終えるほうが難しい。
戦争は、兵士だけでなく、
老人や子どもにも災いをもたらす。
戦争は、人々の四肢だけでなく、
心の中にも深い傷を負わせる。
精神は、操作の対象物ではない。
生命は、誰かの持ち駒ではない。
海は、基地に押しつぶされてはならない。
空は、戦闘機の爆音に消されてはならない。
血を流すことを

貢献と考える普通の国よりは、
知を生み出すことを誇る
特殊な国に生きたい。
学問は、戦争の武器ではない。
学問は、商売の道具ではない。
学問は、権力の下僕ではない。
学問は、生きる場所と考える自由を
守り、創るために、

私たちはまず、思い上がった権力に
くさびを打ちこまなくてはならない。
自由と平和のための京大有志の会

この声明書を目にし、心震わせた方は少ないのでは？
今国会で審議中の安全保障関連法案。この法案に対し、八月三十日には三十五万人もの人々が国会周辺に押し寄せ、反対の声をあげています。あまいる探偵団の面々もまた。
今回は、滋賀の頼もしいお母ちゃん達や高校生の路ちゃんと一緒に「自由と平和のための京大有志の会」発起人のおひとり、京大人文科学研究所・藤原辰史先生にお話を伺うべく京都の街へとくり出しました！
対談開催日／二〇一五年八月二十七日／京都大学

藤井朋子（以下朋子、あまいる探偵団）／まずはこれまでの研究も踏まえてどのような思いでこの声明書を書かれたのかな？というところからお話を伺っていきなすと思えます。
藤原辰史（以下藤原）／まず前提としてなんですけど、この声明書は多くの作品ではなくて、今までいろんな方と話して学んだことをいわば「いた」のように、あるいは「お筆先

のようにして、十五分間無心状態の私の中に入ってきたという感じのもので、でも、もつと言うと「詠み人知らず」ってありますよね、防人の詩みたい。詠み人知らず」として皆さんに読んでいただきたいと思ってるので、あくまでこれから話すことは多くの声明書に対する解釈になるということをあらかじめお伝えしておきますね。

それで、最初の「戦争は〜」という六つの部分、実はこれはぼくたちが、八年間かけてやった第一次世界大戦についての共同研究で学んだことなんです。第一次世界大戦は、二十世紀を決定づけた戦争です。初めて大量の民間人を巻き込みました。空爆もあったし、いっぱい民間人が動員されて、しかもドイツでは民間人が飢えて死んでいった。食糧を絶たれてドイツでは七十六万人の餓死者がでた。これがあったからこそナチスが生まれ第二次世界大戦が生まれたという戦争なんです。国際連盟も、第一次大戦の後に出てくるし、パリ不戦条約もここから出てくる。そういう意味で極めて重要な戦争、百回以上の研究会開いて一生懸命ぼくたちなりに考えたことが、この最初の六行に入っていると思います。

たとえば、「兵士だけでなく、老人や子ども」ってありますよね。つまり、兵士とほとんど変わらない数の老人や子どもや女性が死んでるんです。ぼくは、子どもが親より先に死ぬということが一番いたたまれないんです。皆さんが一番よくわかってらっしゃると思うんですけど、その悲しみをヨーロッパの人が知り尽くしてしまったのがこの大戦です。

もう少し現実的に言っていると、絶対に戦争は始めるよりも終える方が難しいんですね。始めるのは意外と簡単に始まっちゃうんです。一応外交的な折衝をしますし、ヨーロッパの場合は各国の王様がみんな親戚なので結構戦争しづらいんです。そこでブレーキをかけようとするんだけど、坂道を転がるように二ヶ月位で開戦を迎える。だけど問題は、終わる方。終わるのには本当に時間がかかった。もつと言つと「終わりがなかった戦争」だったんです。いっぱい禍根を残して、停戦してからもいるんなところで戦争が続いて人が死んでいきました。

「生命は誰かの持ち駒ではない」というところなんですけど、おそらくこれは、今の若者の現実だと思っていて、当然戦争は生命を持ち駒にして使い捨てにして殺していきますけども、戦争と同じような現実が今の高校生、大学生に突きつけられている。ブラックバイトとか派遣労働とか本当にぎりぎりの給料でセクハラ、パワハラ受けながら、本当に持ち駒のようになってる。だから働いているみなさんのためにもこの文章はあると思います。

次の二行「海は、空は」のところは沖縄のことがイメージされている。
それから十一行目からの「普通の国と特殊な国」というところですけども、安倍さんの言う「普通の国」という言葉には、それなり

の血を流してそれなりの軍隊をもってそれなりの認められる国家になりたいという欲望が満たされているんですけど、これっておそらく教育にもつながってくる。普通の人間になりなさい、普通の考えをもって、普通に上司のいうことを聞いて、普通にお金を儲けて、普通に人生を送ってくださいという、そういう画一化する教育を必死に文科省がやってきてるわけです。ついに大学まできて、歴史とか文学とか哲学とか思想とかをやっている人は役に立たないから削減していきますという通知が二回もきたんです。これはもうぼくたちはけんか売られたも同然なので、買うしかない、ということでも今回立ち上げたもう一つの理由は、政府による学問への公然たる侮辱なんです。今の国会を見ていると彼らの答弁に知性のかけらもない。ぼくたちが生命のつぎに大切に思っている言葉を、本当に大事にしない人たちがだ々と強く思います。その時に考えたいのは、今生きてるこの世界っていうのは実は私たちが生きたい世界ではない。だから普通に生きたいとなると長いものに巻かれていくんですけど、「それじゃない」と言うことは結構勇気がいるし、とんがらなきやいけないし、特殊じゃなきやいけない。皆さんもたぶん特殊な生き方をされてるから輝いていると思うんですけど、そうじゃないと変わらないうらい世の中ダメになってるので、こういう文章が出てきてると思うんです。

で、最後の三行、「学問は〜」のトリプルパンチ。「学問は、戦争の武器ではない」というのはもう現実にはぼくたちのところにきています。防衛省からメールが届いたんですけど、お金をつけますので戦争のために役立つ研究をする方はぜひこちらに応募してくださいと。一〇／え〜！

藤原／ぼくにも来たんですよ。つまり国立大学の文系の教員全員一斉メールです。もちろん民間にも役立つ研究、ロボットの開発ですとか、防衛省はお金を出しますと。それを見ついに来たかと、大学を戦争の武器にしようという。そういうのがあってこういう言葉が出てきたという気がします。

「学問は、商売の道具ではない」に関しては、全世界的に大学っていうのはお金儲けになることに優先的にお金がつくという不思議な状況になっています。ぼくたちがただ第一次大戦の研究をしてもみんなの命は救えないですから、やっぱりいらない、役に立たない、商売の道具にならないということになるんです。でも、もう一度原点に戻って、ぼくたちはなんで研究してるかという、やっぱり、自分たちはどこから来て、どこへ行くのかを知りたいからなんです。知ったことをみん





の戦いに勝ったとしても九月で終わらないですよね。なぜかっていうと一九九九年に周辺事態がすでに通っているし、二〇一四年には武器輸出三原則が緩和されている。安保法制が廃案になったからといって、決して戦争国家への道が途切れる訳じゃないんです。とくにアメリカから直接的にプレッシャーがかかってくるので、問題は全然解決されない。長期戦になるんですよ。で、展望としてはぼくたちの運動は息長くやっていきたい。先日日比谷野外音楽堂で開催された四千人の日弁連の集会でSEALDsの学生さんが「もう疲れました、限界ですよ。親、先生、友人達から何言われるか分かんないけどやってるんですよ」って言ってました。ぼくも仕事と両立させながら、毎日力を振り絞ってやってます。みんなギリギリのラインで闘ってる。しかし、実はそれは危険でもある。本当は持続性が必要、二、三年単位で、じわじわと追いつめるような運動も一方が必要。即製の運動でガーツとやっちゃうと、カクンと折れる恐れがある。実はSEALDsのみなさんもそれがよくわかっている。長く続けるには、楽しくやる必要があるし、そういう運動が強いんですよ。それが実は安倍政権を長期的にもっと言うところの政権も軍事路線だろうから、そこを選挙のときも含めてどう倒していくか。長期戦になる。うしるにアメリカがいる限りね……。

玉崎 露 (高校一年生) / 日本は戦争に負けたからアメリカのいうことを聞くんですか。
藤原 / いい質問ですね。学者の間でもいろんな意見があるので、いろんな方に聞いたら良いと思うんですけど。なぜ、アメリカのいうことを聞かないといけないか。一つの学説は、日米安保条約っていうのがあって、世界一の軍事力をもつアメリカに守ってもらわないと危機的な状況になったときピンチだから、という考え方。これは冷戦が終わった段階で本来は崩壊すべきだったんですよ。だって仮想敵国がソ連で、ソ連が攻めて来たときの日米安保条約だから。それがなくなったら今、本当は廃止してもいいのにさらに強化されている。それはなにかというと、アメリカの世界戦略が、ソ連とのイデオロギー対決、つまり冷戦から、中東に向かい、地球とか資源を手にする戦争に変わっている。日本は資源が少ない国だから、アメリカの資源戦争に乗っていかないと国を保てないという危機感があるんじゃない。アメリカの後ろについていかないと、資源がないとお金が儲けられない機械産業とか軍事産業とかが困る。これが一つ。ここからは、ぼくの補足意見を加えましょう。日本

は敗戦してすぐ、アメリカから脱脂粉乳と小麦を援助してもらい、それらを給食などを通じて食べさせられた。そのあととりあえず、牛乳は自給できるようになったんですが、小麦粉はいまなお世界各国から輸入している。オーストラリア、カナダ、アメリカ。特にアメリカからの輸入食品は多岐にわたります。それと家畜の飼料も、ほとんどがカナダやアメリカからの輸入です。もし今、アメリカの言うことを聞かなかつたら、食糧の輸出を止められて日本は飢え死にするという危機感があると思うんです。アメリカの経済原理に乗っていかないと加工産業で生きていくような日本の経済戦略が潰れちゃう。それはどういう戦略かというところ「ご飯のアウトソーシング」。他国にご飯を任せるっていうこと。米は一応自分たちで食べるだけありますけど、ではなぜTPPに乗っていくかというと、そうすることで日本の農業の補助金を少なくしてそのお金を経済成長に持っていく戦略。もう一つは、海外の安い食糧を輸入できれば、日本国内の賃金が下げられるんです。賃金というのは必要最低限の生活を営むためのものなので、食費が下がってくれば少なくとも賃金を上げる理由にはならない。「あなたすでにカレーが三百円で食べられるでしょ。なのにこんな高い賃金いらなくてしょ」って。これは誰が喜ぶかっていうと、当然賃金を払う企業ですよ。ね。そういうのを全部ひっくり返して、食べ物で首根っこ掴まれていると、ぼくは考えています。

七夏 / 学校給食もアメリカの指導から始まったこと。給食を完全米飯にしたいっていうお母さん達の動きが各所であるんですが、それもやっぱり自分たちの暮らしを守るっていう意味でも力強い動きというところですね。
藤原 / そうですよ。日米安保条約を脱するために給食から変える、というのは実はそれほど突飛な発想じゃありません。対米従属から脱するには、まず生活から。給食は完全米飯でいいんです。地産地消で。でもこれぼくの意見ですから、一般的に言われていることじゃないですけどね。

▼息の長い運動を
藤原 / ふっと足下を見ると、急に不安になるじゃないですか。ぼくもそうですけど、嫌がらせとか受けると、ひょっとしてみんな支持してなくて、ひとりりで変なことやってんじゃないかって、ふっと不安に駆られて足下すくわれそうになるんですけど、それはやっぱり確認が必要。同じ考えを持っている仲間がいるんだって。そうだ、名言があったんだ。ぼくのお世話になっているイギリス史研究者が言ってたんですけど、「愛とはなにか」って問いへの答え。愛っていうと、気持ちとか心とか思いますよね。でも、彼は「ちがう、愛とは確認だ」と。これすごい名言だと思って。つまり愛ってブラックボックス。愛っていうのは実は繰り返しの確認のうえで成り立って

いて、常に何らかの形で確認していることでその存在が初めて「あるかな」って思える。たとえばみなさんの集まりもそうですよね。みんな心が通じ合ってるから何も言わなくたって離れないよねっていうのではなく、常に言葉を発したり、通信を書いたり、電話をしたり、メールを書いたりしているから成り立っている。それは逆に、「確認」のなかでさまざまな違った意見がいっぱいでてくることを、受け止める愛でもある。ぼくたちの発起人もそうで、この声明書に賛同してくれたからもう大丈夫っていうのではなく、毎回お互い確認を続けていかなきゃならないと思うんです。こういうのって当たり前のことのように見えて実はおろそかにされている。

たーさん / 私もやっぱり樂觀と絶望の狭間にいつもいて、両方をいつも見ている。どっちかなーどっちかなーって。

藤原 / 両方が自分の中にいるんですよ。もちろん法案を廃案に持ち込むのが至上命題だけど、仮に通ったとしてもそのあと闘うべき道はいっぱいあるんですよ。そのときに必要なのは長い息でやっていける運動なんです。ぼくたちもなんで名前を「自由と平和のため京大有志の会」にしたかと言うと、長生きさせるためです。「安保法制に反対するための」とすると九月で終わりです。ぼくたちはこれを始めた瞬間から、「ひるば」とよんでいる勉強会という形で、市民の方や大学の垣根を越えて新しい学問を作ろうと思っていましたから、安保法制がどうなるかと続けなくてはならない。本当の自由と平和が自分たちのものになるまで。

和子 / それを見越して名付けたんですよ。

藤原 / そうなんです。発起人の仲間も、ぼくが猪突猛進型であることを知っていて、「まあ藤原くん、ボチボチや。疲れたら休みや」と。それが本当に大事だったことを身に沁みて感じています。みなさんも子育て、毎日のごはん、仕事、その上で運動もされているから疲れてらっしゃると思うんですが、生活の基盤がある人は逆に強いわけで、その中で考えたこと、暮らしの中で考えたこととか、日々の暮らしの中から出てくる集まり、それが強いと思うんですよ。ぼくはひょっとしたら九月末に倒れているかもしれない(笑)。

真由美 / 継続的な活動は楽しんでこそですね。やっぱり楽しい活動を自分がやることに満足を得る、ということが大事で、そこに人は引き寄せられると感じます。

藤原 / そう、自己満足っていうのは大事。朋子 / そういうの、ここにいるお母ちゃんたちは上手くやってるよね。

七夏 / でも落ちちゃみたくない若い子たちに励まされる。あんなちっちゃかったのにな。お風呂入ってたのにな(笑)

藤原 / そう、若い人たちに応援されると、おじさんはがんばっちゃうものです。
一同 / 笑。先生、今日はありがとうございました。